



ドイツからの  
環境・エネルギー  
先端レポート

● 松田 雅央 (まつだまさひろ)  
1966年盛岡生まれ。カールスルーエ市在住ジャーナリスト。  
1992年東京都立大学工学研究科大学院修了、1995年渡独。  
趣味はサイクリング。自然豊かな農村地帯を走る爽快さが好き。  
<http://www.umwelt.jp/>

## 気候変動と国際協力のあり方

### 異常気象はヨーロッパでも深刻化

今後100年の間にドイツの気候は大きく様変わりすると考えられています。

平均気温は現在の8.3℃から11℃に上昇し、夏は猛暑が増えて雨は減りそうです。干上がった川ではタンカーが立ち往生し、作物の被害だけでなく地方によっては砂漠化に悩まされるかもしれません。逆に冬は今より寒くなり、降水量が増えて雪解け時の洪水が頻発。さらに、年間を通して嵐や異常気象が多くなるといのがドイツ気象協会の気候・環境部門ベント・シュミット氏の予測です。実際の異変は100年を待たずとも始まっていて、2002年にはエルベ川の大氾濫、2003年夏には500年来という熱波がヨーロッパを襲いました。

### ライン川の洪水対策に見る協力体制

温暖化を含めた気候変動には世界が一丸となって立ち向かわなければなりません。サミットに先立つ各国の話し合いをみても明らかな通り障害には事欠きません。国を超えた協力はどうあるべきなのでしょう。

4月半ば、ベルリンにドイツ連邦と各州の関係者が集まり「気候変動戦略会議(DAS)」が開かれました。今回のテーマは「水利」。ヨーロッパを流れる大規模な川はほとんどが国際河川ですから、こういった場には必ず周辺国も参加します。オランダ国王もビデオメッセージを寄せていました。

スイスアルプスを源にして6ヶ国1,320キロを流れ、北海(オランダ)に注ぎ込むライン川の洪水対策は多国間協力の好例と言えるでしょう。



雪をいただくアルプスの山々  
アルプスの水河は縮小を続けており自然環境、観光産業、水利に影響を及ぼし始めています。

河口からおよそ200キロ上流にあるケルンは数年に1回洪水に見舞われますが、独自にできる対策は限られ、上流部での対策が必須です。最近では川沿いの遊水機能が注目されていて、例えば上流にあるフランスにまとまった規模の遊水地が1ヶ所整備されればケルンを襲う洪水の波が数センチ下がり、これが瀬戸際で決定的な意味を持つとされます。

フランスにとって、遊水地整備は直接の利益に繋がりません。それどころか遊水地域に含まれる農地が被害を受けることもあります。ある程度の被害は農家と自治体の取り決めに織り込まれていますが、気候変動により計画を上回る頻度で洪水が起きるため訴訟に至るケースも出てきました。流域6ヶ国がどれだけのリスクを負い、どのような役割を担い、その費用は誰が負担するのか。その調整ひとつとっても困難な作業です。



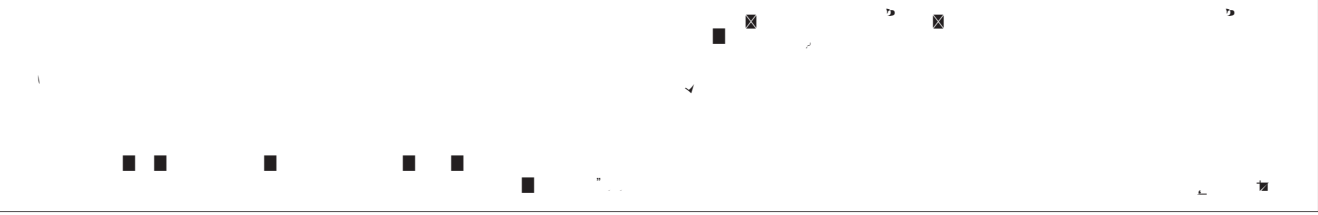
ライン川の洪水で水没したケルン(1993年)  
洪水対策は本流だけでなく支流全域で対処すべき広域課題です。

### 重要なのは「プラットフォームづくり」

洪水対策には短期、中期、長期のシナリオがあります。上流で大雨が降れば4、5日で数百キロ下流に影響が現れ、新たな遊水地の整備は数年以上かかる作業です。数十年後を正確に見通すことは不可能ですが、だからこそ最新情報に沿って長期計画を見直す柔軟性が大切になります。

短期から長期まで、いずれのシナリオでも不可欠なのが国際協力。そこでは異なる価値観と課題を持った国々が集まり、利害をすり合わせて問題に取り組むネットワークの整備、つまり「プラットフォームづくり」が求められます。規模は違いますが、サミットの最も重要な役割もプラットフォームの育成にあるはずで

#### 編集後記



表紙写真 写真家阿久沢利夫氏が撮影した森の写真をお届けします

軽井沢町は明治21年、アレキサンダー・クロフトンショーハウスが最初の別荘を建ててから発展し、多くの観光客が訪れています。そこで毎年開催される「ジューロ・テ軽井沢」。新緑の中を走るこのクラシックカーラリーの道すがら旧軽と言われる別荘地で撮影したものです。



ドイツ・アセット・マネジメント株式会社  
Deutsche Asset Management  
A Member of the Deutsche Bank Group



投資信託営業部  
☎ 0120-442-785  
(受付時間:営業日の午前9時から午後5時)  
<http://www.damj.co.jp>